

## 東南アジア：工業化への道

Dolphin Training & Consulting

田中 元二

発展が著しく、脚光を浴びている東南アジアの諸国であるが、ミクロで見ると、国によって、工業化の進展状況は斑模様である。

工業化について、フィリピン、ベトナム、カンボジア、ラオス、タイ、ミャンマー、マレーシア、インドネシアを考える。

### 1. 国によって違う工業化のステージ

工業化の進展の程度から東南アジア諸国は次の4グループに分ける事ができる。

- ① タイ、マレーシア
- ② フィリピン、インドネシア
- ③ ベトナム
- ④ カンボジア、ラオス、ミャンマー

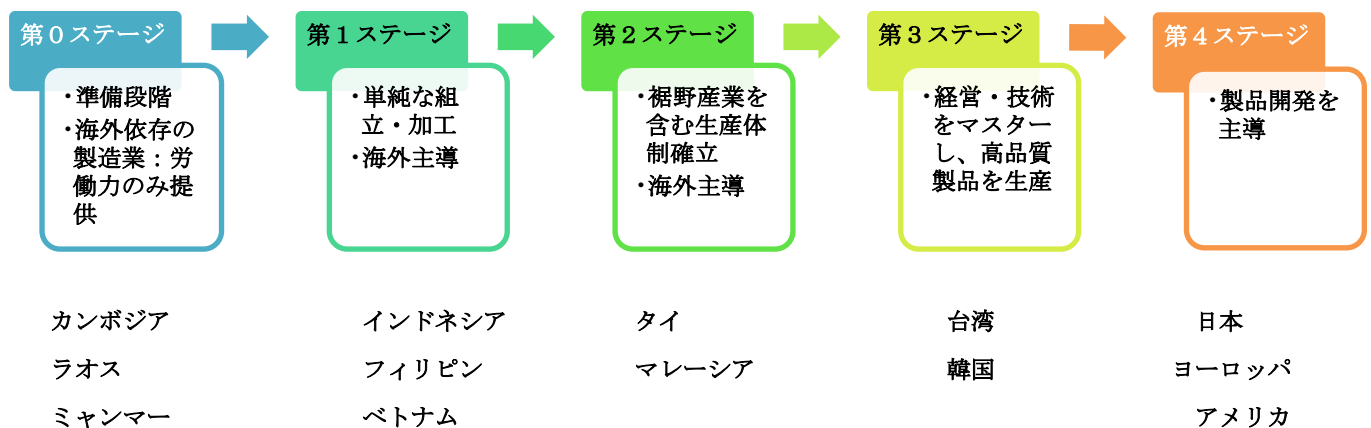
それぞれの特徴をまとめると次のようになる。

	国名	特徴	
①	タイ、 マレーシア	両国とも国策で工業化に取り組んできた。  タイ：1960年産業省令法を制定し、輸入代替え工業化に着手以降、両国とも一貫して工業化に努めてきた。また、近隣諸国のような政治の不安定さもなく、着実に工業化が進んだ。  マレーシア：1986年第一次工業化マスタープラン作成時から工業化が積極的に進められる  工業化の主役となったのは タイ：自動車の組み立て工場を中核とする自動車関連産業 マレーシア：家電に代表される電気・電子産業	
②	インドネシア フィリピン	インドネシア：1966年に規制緩和が始まり、工業への発展の動きが始まった。しかし、1970年から外資に対する規制が始まり、1974年から現地化の要請が強まり、プリブミと呼ばれる、現地パートナーの義務化が始まると共に、政府主導の製鉄製鋼とアルミ精錬の事業や野心的過ぎる国産部品使用の義務化などが行われるなど工業化の動きは停滞した。1984年より政府の方針の見直しが行われ、投資環境は改善された。	

		フィリピン：1960年代より輸入代替えによる工業化が進められた。しかし政府の積極的な政策が施行されず、部品を輸入し完成品を輸出する組立の一部を担っているに過ぎない。課題としては裾野産業の脆弱さが目立つ。
③	ベトナム	1975年ベトナム戦争が終結した。 1986年にドイモイと呼ばれる刷新戦略を採用。これにより、金融危機の影響なども受けるが、着実に工業化が進んでいる。
④	カンボジア、 ラオス、 ミャンマー	カンボジア： 1984年ポルポト派が制圧される。1993年総選挙が行われ、ポルポト派が駆逐される。1998年ポルポト氏死亡。 従って、カンボジアの工業化は途に就いたばかりと言える。
		ラオス： 1975年に内戦は終了するが、1987年にタイとの休戦協定が結ばれるまで、混乱した状態が続いた。
		ミャンマー： 1962 - 88に設立されたビルマ式社会主義の影響を受け、工業化は進まなかった。その後、ビルマ式社会主義は放棄されるが、制度は長く残った。その後、2010年頃から工業化（製造業の民営化）が始まった。

現在置かれている、各国の工業化の進展状況を確認すると次のようになる。

### 工業化のステージ



## 2. 各国が工業化に取り組み始めた時期

各国の工業化への取り組みを始めた時期はいつであろうか。これは国によって異なり、大きく分けると3つのグループに集約できる。

各国が工業化に本格的に取り組み始めた時期を次表にまとめる。

工業化を各国が本格的に取り組み始めた時期

工業化のステージ

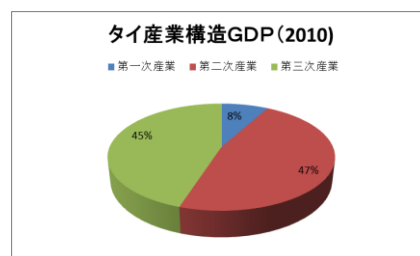
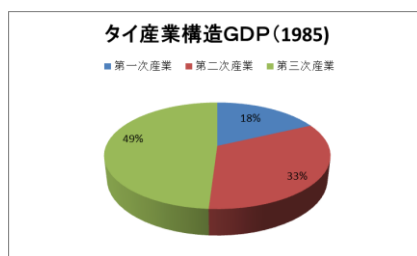
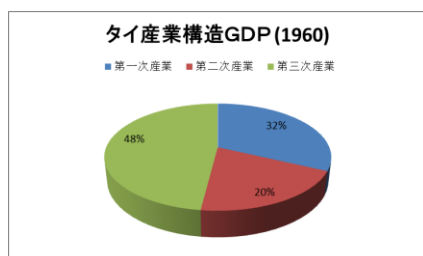
	1960	1970	1980	1990	2000	2010	2020	工業化のステージ
①	タイ	➡						2
	マレーシア			➡				2
②	インドネシア			➡				1
	フィリピン	➡						1
	ベトナム			➡				1
③	カンボジア				➡			0
	ラオス				➡			0
	ミャンマー						➡	0

- タイとフィリピンが比較的早く工業化に取り組み始めた。タイの場合は、工業化の政策を適宜見直し、より現実的なものとしてきた。フィリピンの場合は、タイなどの場合と比べると政策の見直しなどが、十分に行われたとは言えず、結果として、工業化はタイに対して遅れている。
- マレーシア、インドネシア、ベトナム、カンボジア、ラオスなどは同じような時期に工業化に取り組み始めたが、工業化に成功したマレーシア、工業化の軌道に乗ったと見られるベトナム、これからと言うカンボジア、ラオスの3つのグループに分かれた。
- ミャンマーについてはビルマ式社会主義の影響を受け、これからと言う段階にある。

### 3. 各国の産業構造の変遷

#### タイ

グラフから見る限り、農業に代表される第一次産業は縮小し、製造業である第二次産業が大幅に拡大している。工業化が確実に進んでいる事を明確に示している。

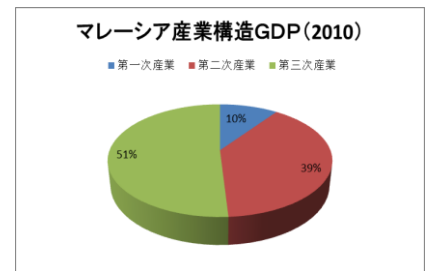
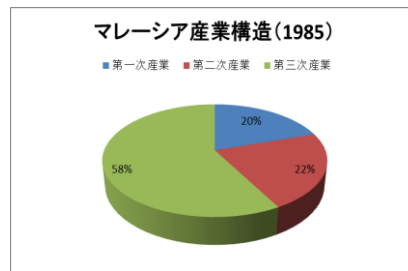


出典：株式会社国際協力銀行「タイの投資環境」

出所：NESDB

## マレーシア

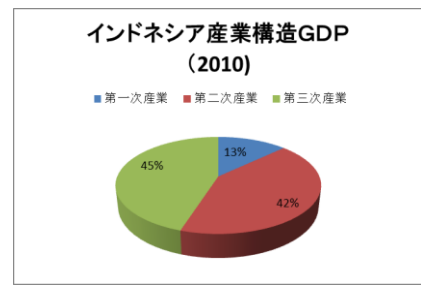
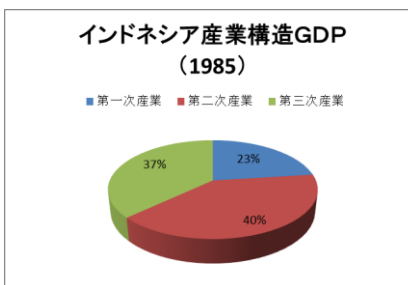
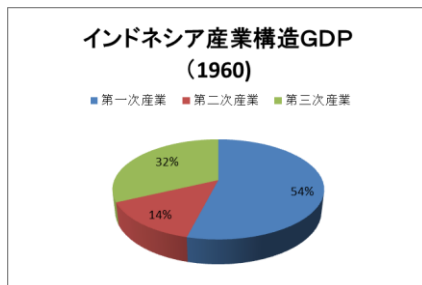
工業化に積極的に  
取組みを始めた 1985 年頃から  
製造業の GDP は増加し  
2010 年には約 40%に達している



出所：Ministry of Finance, Economic Report

## インドネシア

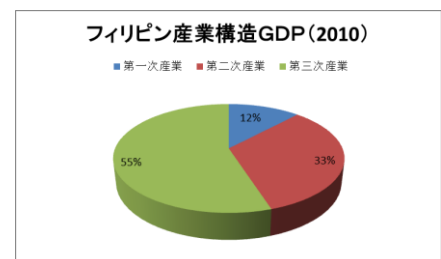
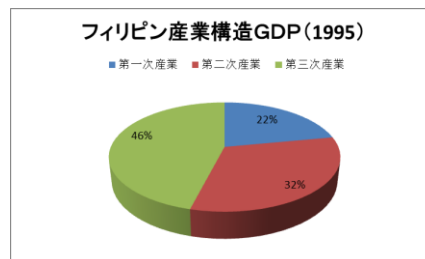
第一次産業の GDP 比率の低下と第二次産業の GDP 比率の増大が顕著である。



出所：国家統計局

## フィリピン

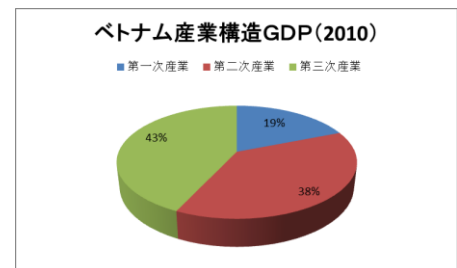
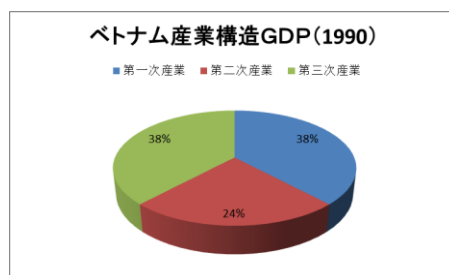
産業構造としては  
第一次産業が半減している  
ものの、第二次産業の増減は  
なく、第三次産業が伸びている。



出所：三菱総合研究所

## ベトナム

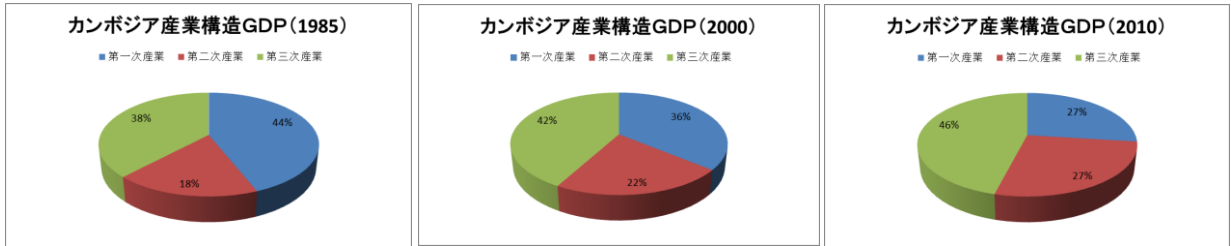
産業構造として  
製造業である  
第二次産業の  
GDP が伸び  
第一次産業の  
GDP 比率は  
低下しており  
工業化が確実に  
進んでいる姿が読み取れる



出所：General Statistics Office Of Vietnam

## カンボジア

急激ではないが、第一次産業の GDP 比率が減少し、第二次、第三次産業の比率が伸びている。

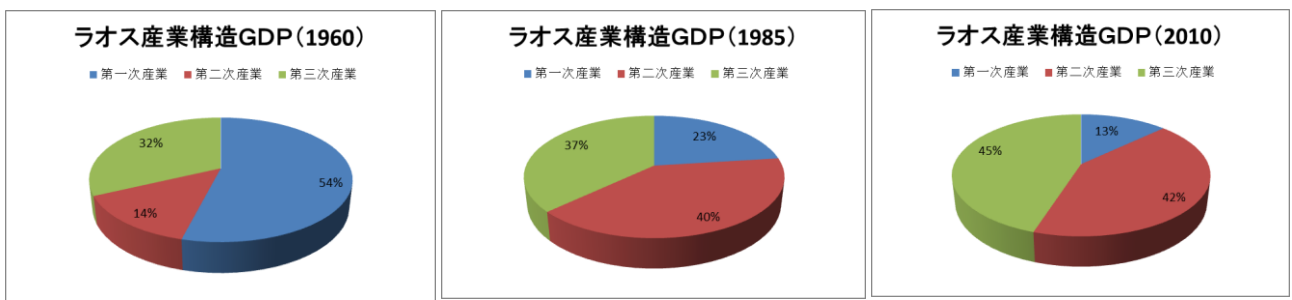


出典：大和総研「東南アジア経済」2012年7月

出所：National Institute of Statistics

## ラオス

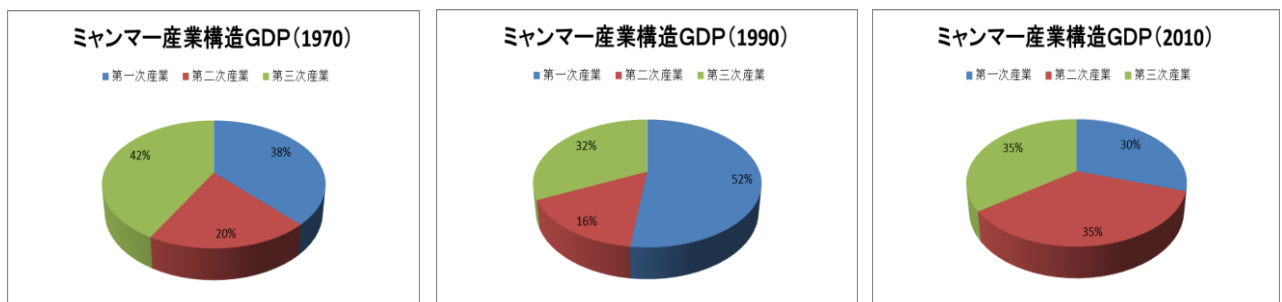
第二次産業の GDP 伸びが著しい。



出所：Lao Statistics Bureau

## ミャンマー

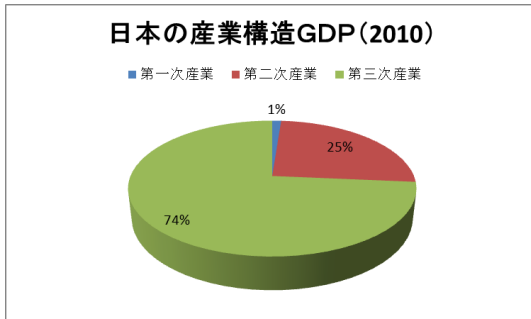
ビルマ式社会主義に基づき、第一次産業が拡大したが（1990年）、工業化については国有企業の財務状況の悪さおよび民間部門への不利な状況により、GDPの低下があったと思われる。その後、第一次産業の停滞と第二次産業の健闘により、2010年のような産業構成となった。



出典：大和総研「東南アジア経済」2012年7月

## 日本 (参考)

日本の産業構造を見ると、東南アジア諸国との違いが良く分かる。



第一産業の GDP 比率は 1%であり、  
第三次産業が全体の 3/4 を占めている。

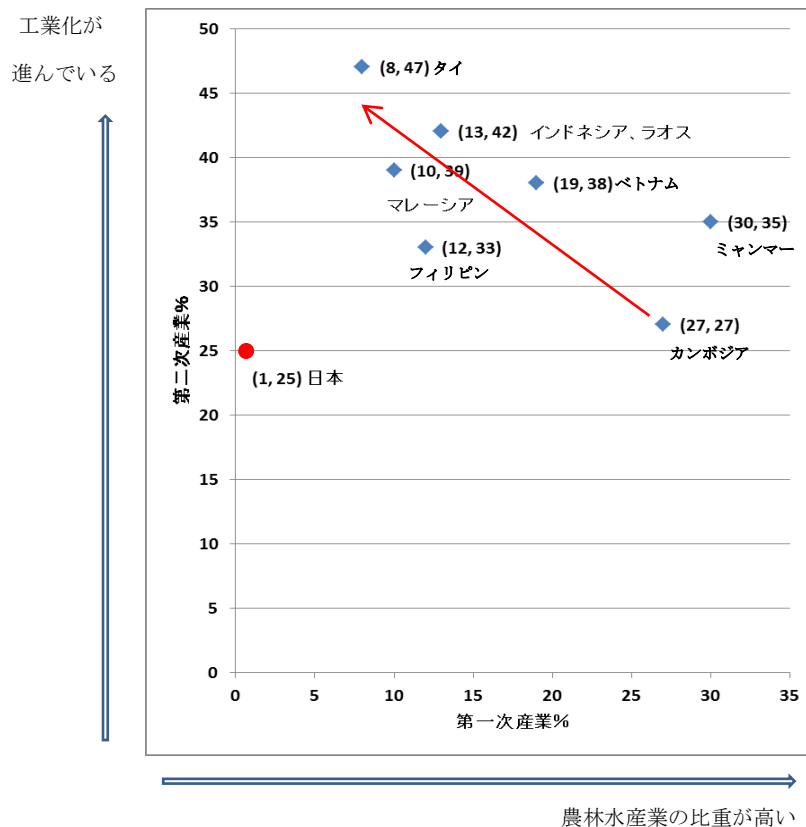
出典：内閣府経済社会総合研究所

## 4. 各国の工業化の進展 (産業構造より分析) : 2010 年

各国の工業化の程度を産業構造より分析すると次図のようになる。

- 点は上に行けばいくほど工業化が進んでいると言える。
- 点が右にあるほど農林水産業の GDP が大きい事を示している。

### 各国の第一次産業および第二次産業の GDP に占める割合 : 2010 年



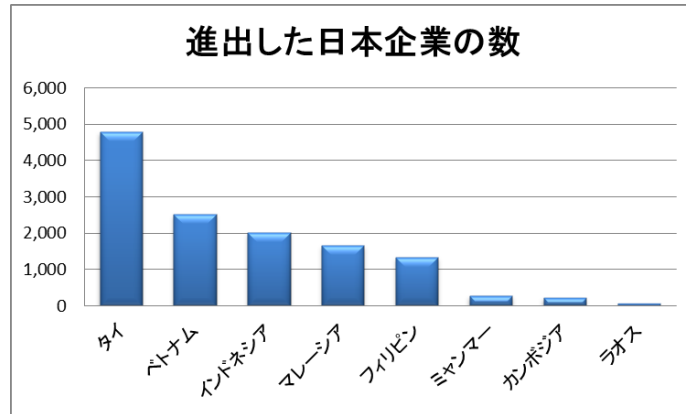
グラフの数字は最初が第一次産業の  
GDP 比率であり、次が第二次産業の  
GDP 比率である。

例：(8, 47)  
↑ 第二次産業の GDP% (47%)  
↑ 第一次産業の GDP% (8%)

赤の矢印の右上側では第三  
次産業の GDP 比率が 50%  
以下であり、左下側では  
50%を超える

## 5. 日本的経営の導入と工業化

東南アジアの工業化については、日本の影響が強く、日系企業が現地の工業化に貢献している姿が見える。



出典：株式会社 帝国データバンク 特別企画：ASEAN 進出企業実態調査 2016年5月

### タイ、マレーシア

「継続は力なり」であり、タイ、マレーシアについては、製造業が十分な力を発揮していると言える。現在は現地での設計開発が課題である。



タイの中心部



マレーシアのモノレール



定着した改善活動の発表（マレーシア）

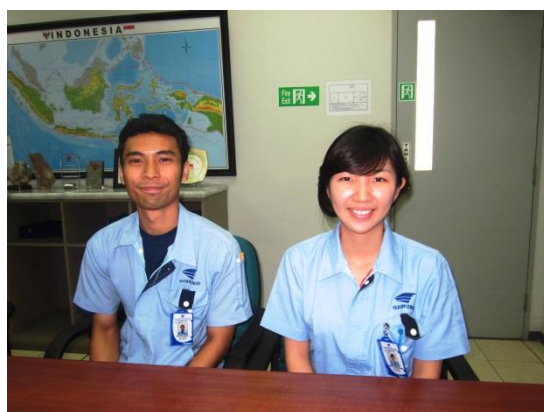
## インドネシア、フィリピン、ベトナム

進出した日本企業をベースに日本的経営が積極的に取り組まれている。

現地従業員の日本への派遣研修および現地に駐在している日本人による指導などが積極的に行われている。(次の写真は HIDA：一般財団法人 海外産業人材育成協会 が現地の研修生を受け入れ、かつ、日本からの指導者の派遣について協力をした会社である。)



インドネシアの日系企業



同社の次の世代を担う幹部候補生

## カンボジア、ラオス、ミャンマー

日本企業の進出も他の国と比べると少なく、日本から進出した企業の数は、タイの1~6%程度である。従って、全てはこれからと言った感じの国々である。

以下はミャンマーの会社の事例である。



長靴製造工程（改善の余地が大きい）



刺繍工場の材料（糸）の管理  
指摘を受けたところは  
しっかりと取り組んでくれる。



ミャンマーの工場には、5S や PDCA などを現地語に翻訳して現場に掲示してあったりするが、実行は全くされていなかった。

今、これらの国に必要な事は、What ではなく How である。5S である整理、整頓は分かるが、どのようにして展開すれば良いのか、やり方を教わっていないので、何もできていないと言う状況にある。

総括として、日本的経営のベースとなる 5S、小集団活動について、それぞれのグループでの展開の状況をまとめてみた。(業種、企業によって違いがあるので、おおざっぱにイメージとして括ってみた)

	タイ、マレーシア	インドネシア、フィリピン、ベトナム	カンボジア、ラオス、ミャンマー
5S	◎	○	×
小集団活動	◎	○	×
日本的経営手法	十分に定着している	推進中	これから

## 6. 今後の展望

東南アジアの規模を見ると、アセアン域内の人口は既に 6 億人を超えている。今後も発展を続けるものと思われ、世界でも重要な地域の一つとなっている。

2015 年 11 月には AEC (ASEAN Economic Community) が発足し、アセアン域内の物・金・人・サービスなどの移動を基本的には自由化することになった。これによって、工業化のステージが異なる国々は、相互補完的な役割を果たす事ができるようになる。

製造業に関して言うと、工業化の完成度が高いタイ、マレーシアと、労働コストが低く手作業が有利な周辺諸国との棲み分けができる。事実、日系企業では既にこのような取り組みを行っている企業も多い。

以上の事を鑑み、日系企業は、アセアンを構成する国々の工業化の進展状況と動向を注視し、今後のビジネスを考える事になるであろう。日系企業のこのような活動が地域の発展に更に貢献し、縁の下の力持ちとしてこの地域の支えになると思われる。今後とも、アセアンの国々の動きを見守っていききたい。

〈プロフィール〉

田中 元二 (たなか げんじ)

海外工場管理コンサルタント

Dolphin Training & Consulting 代表

生産管理学会会員

実践経営研究会会員

---

日産自動車輸出部門配属

海外工場指導：タイ、アイルランド、南アフリカ、ニュージーランド、インド

Dolphin Training & Consulting 社 設立

海外工場指導：タイ、マレーシア、インドネシア、フィリピン、カンボジア、ラオス、  
ミャンマー、ベトナム、インド、パキスタン、イラン、エジプト

---

著書：「海外工場の運営と管理」（日刊工業新聞社）

「ISO9000 取得マニュアル」（日刊工業新聞社：共著）